
記憶喪失から始まった災難

菜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶喪失から始まつた災難

【Zコード】

Z4931D

【作者名】

菜花

【あらすじ】

「ナン達はいつものように旅行へ行っていた。しかし殺人事件がおきその犯人は自殺をするために海岸へ向かう……その後を追うコナンだったが……注意・一時期コナンの名前が和樹にかわります。

プロローグ

江戸川コナンが居なくなつてから十日。

彼の捜査はまだ続いていた。

悲劇の幕開けは突然だつた。

誰も予想なんとしていなかつたであろうこんな日を。

ただ普通に犯人を追い、追い掛けたのが海岸それも崖……

犯人が自殺するために来たことなんてコナンにだつて解つてた。

解つていたから犯人である彼女を助けようと手を伸ばした……。

此が悲劇の一ページ。

プロローグ（後書き）

久しぶりです！

今回ただの事件話です。組織はでてきませんーでも怪盗キッドが出てきます！！！

読んでくれると嬉しいですー！

菜花

第一話～突然～

犯人である彼女、彼女が犯した罪——それは彼氏を殺害した。三角関係だった彼女達、

『彼を自分の物にしたかった』

そんな理由で殺しそして彼女自身も崖から落ちて死ぬ計算だった。

其を阻止したのが紛れもなく江戸川コナンだった。

「こないで！！ 私は孝たかしの側に行くのよ！ 行つて幸せになるの！」

彼女は泣きながら崖の近くへと向かった。コナンは一生懸命に説得をした。しかし彼女はそれを聞かない。そして彼女は崖から自殺したはずだった。

だが、彼女はその場にいた。彼女を助けた反動でコナンが崖から落ちてしまった。

蘭や探偵団、小五郎に灰原や博士と楽しい旅行にするはずだった。

いつものように、懸賞で小五郎が旅行券を当てたのである。その晩同じホテルで殺人かおき彼女がにげなければ、誰も悲しまなくて良かつた。

みんなが駆け付けた時には遅かった。ただ彼女とコナンを入れ換わりに崖から落ちる光景をスローモーションのようにみた。

なのに、その光景は一瞬の出来事で小さな子供が落ちた水しぶきの音だけが聞こえた。

「コナン君ーー！」

蘭は叫びにも似た声で崖に駆け寄りしたが小五郎が引き留めた。

「う……そ……どうして？ 私が……私が自殺するはずだった。孝のところへははずだつた……なのにどうして？」

彼女は腰が抜けたようにその場に座りこんだまま手錠をかけられた。
その後、崖下の海を警察が調べたがコナンの生死は確認されなかつた。

第一話～突然～（後書き）

ありがとうございました
タイトルと内容あつてないかな（苦笑）

と言つわけで始まりました！何れくらいのストーリーか作者自身も
わかりません。
まだ最後までかけてませんので。
では！

次回コナン発見されます（苦笑

菜花

第一話～夫婦との出会い～

（浜辺）

四十代の夫婦が浜辺を散歩していた。

「ね、あなた。彼処に誰か倒れているわ」

何処かお洒落な女人の人とごく一般的な男の人。二人が見た人それは小学生くらいの少年だった。女人人が駆け寄る形でその少年を抱き上げた。辛うじて息があった。そして痛々し怪我。夫婦はすぐ病院へと連れていった。

医者がいつには崖から自殺したかもしないという。息があるだけでも奇跡だつた。怪我は切り傷と全身打撲傷そして後頭部強打だつた。

身元なんて分からぬ状態で一人はその少年を預かるといい、医者から了承を得た。

（三日後）

少年は目を覚ました。困惑したように周りを見渡し一人に気付いた。

その光景を見て男の人があわてて、起き上がった。

「おお。やつと目を開けよつた。おい、千代一・千代

男の人は千代の肩をゆすり起こした。

「ボウヤ大丈夫かね？ お名前は？」

心配そうに彼を見た。しかし彼の様子がおかしかった。

「な……まえ？」

「そういう名前。なんていうの？」

「わからない……何も覚えてない」

夫婦は驚いて看護婦をよび診察をしてもらつた。

「記憶喪失ですね。後頭部強打によるものですよ」

深刻そうに医者は一人に報告した。しかし、一人はさほど驚いてはいなかつた。

「では、あの子治るのですか？」

「大丈夫だと思います。これは一時的な症状ですから」

「すみませんがあの子を引き取らせてください。記憶がもどるまででいいです。お願いします。」

医者に深々と頭を下げるともう一度了承を得た。

検索もおわり少年は、病室に戻つた。

「今日から私達がお母さんとお父さんだからね」

少年におばさんが話しかける。

「そうだ…貴方の名前和樹一人で考えたのよ」

二人はニコニコしながら少年に話しかける。しかし少年は一点を見つめ何かに怯えていた。その何かは一目瞭然でわかった。それは今まで少年が身につけていたであろう蝶ネクタイ型変声機と時計型麻酔銃だった。

「頭……痛い」

少年——和樹は頭をおさえて苦しみ出した。その光景をみてお母さんと名乗った千代が抱き締めた。

「大丈夫。大丈夫だから落ち着いて。ね？」

優しい声で一生懸命慰める。そしてその頭痛は少しづつひき、その代わり一人の女性の名を口に出した——蘭——と。

第一話～夫婦との出会い～（後書き）

読んでください有り難うござります！

夫婦が見つけてくれました！小学生くらいの少年を…！

此から後期テスト一週間前に入るので
更新が今まで以上に遅くなりますm(_ _)m
申し訳ございません

次回、米花町にいる方々と杯戸町、（後、過去の記憶かな）

では！

菜花

第三話～夢～

（米花町）

コナンが居なくなつてから丸一日がたつた。その間も情報が入らず打つ手がなかつた。

そして、時が経つのははやいものでもう十日も過ぎていつた。あの日から探偵団のみんなの元気が無くなり、蘭は学校帰りにあちらこちらの病院を調べ回つた。

そして、発見した。しかし、蘭が来たころにはもう退院済みだつた。

（杯戸町）

千代はコナンである和樹を自宅へと案内した。和樹があの病院で思い出したのは“蘭”という名前だつた。

千代はいろいろ話しかけるが和樹は頷く以外無口だつた。

「ここはね、杯戸町つて言つんだよー。」

千代が教える。そして和樹は“杯戸町”といふとばで何かが頭に過つた。

「近くに帝探小学校つてある?」

和樹の言葉に千代は驚いた。

「あるわよ。隣の町だけど。またか、帝探小学校に通つてたの？」
「わからない。でも懐かしい感じがする……誰かとグループでいた
ようなそんな感じがする」

そこまで言いまた黙りこんでしまった。

「明日帝探小学校の周り散歩してみようか？」

千代の問いかけに和樹は頷いた。

その夜和樹は寝付けずに今までの事を思いだし考えた。

(蘭つて誰なんだ？あの日、頭に過つた。大切な何かを忘れてる
……それに小学校。なんで小学校が出てきたんだ？俺自身誰かも
わからねえのに……ツ　まだ、何かを思い出そうとする、頭が
われるみてえにいたい……後少しで何か思い出せそうなのに——)

和樹の思考はそこで途絶えた。

(ねえ……君。)

(え……あ、何！？)

(好きな子いる？　ほら嵐になる子とかいるでしょ、学校に？.)

(えっ、いなによ。そんな子)

(私はいるよ。すついじへ嵐になるやつー)

(へーそれってさつき捜してた・・・つてお兄ちゃんの「じじやないの?」)

(……そりゃ)

次の日

(夢?)

和樹は昨日寝入った部屋で田を覚ました。

(なんか懐かしいような……それに名前わからんねえままだ。誰の話しだったんだるう)

考えながら寝室からリビングへむかつた。

「おはよう和樹」

「……」

返事のない一樹にもう一度名前を呼ぶと短く“おはよう”とかえされた。

「今日帝探小学校いつてみようか?」

「うん」

食事を済ませ一人は支度を始めた。

二人は帝探小学校の周りを一通り散歩してみた。

「ここ知ってる。……ツ」

和樹は頭を押さえてしゃがみ込んだ。千代は和樹を抱いて帰りうつした。

「工藤君！？」

後ろから赤みがかつた茶髪の少女——灰原哀が驚いた顔で立つっていた。

「え？」

千代は呼ばれた方を振り向いた。

「あ、すみません。私が知ってる男の子と似ていたので」

次に驚いたのは千代だった。千代は彼を見ながら灰原に話した。

「この子のこと知ってるの？ 十日ほど前に砂浜で倒れてたの。この子は今までの記憶がないのよ」

千代は寂しそうにいつの間にか眠っていた彼をみた。

「あの、私灰原哀って言います。もし、彼に私や江戸川コナン、毛利蘭つて名前で反応したらここに電話してください」

灰原は電話番号を書いた一枚のメモ帳を千代に渡した。

「ええ、わかつたわ。私の名前は山本千代っていうの」
名前をいい会釈をした。一人はそのまま別れた。

千代は“江戸川コナン”つといつ名前に聞き覚えがあり、家にかえると慌てて和樹を布団に寝かせ新聞を見た。

「やつぱり、彼キッドキラーね。フフ丁度いいわ

千代は新聞を片付け

キッドから届いたカードを手にしながら和樹の寝顔を眺めた。

第三話～夢～（後書き）

お待たせしました。久々の更新です！

そして明後日からテスト開始！なので次の更新予定は連休か15日以降です。すみません。また一週間飛びことをお許し下さい！

さて

夢の中の会話は単行本・テレビアニメ版の一巻を参考に！
誰の会話かわかります

見なくともわかるかもしだれませんが……

・・・は人の名前入ります

では

次、事件ぽいこと発生！

菜花

第四話～戻りつつある記憶～

和樹が目を覚ますと千代が居た。

「何か思い出した？」

千代が優しく微笑み和樹を見る。しかし、和樹は横に首をふるだけだった。

「じゃあ、一つ二つ質問していい？」

和樹は不安な顔をしながらも頷いた。

「貴方の名前・江戸川コナン君？」

その名前に一気に和樹の目が丸くなった。

「灰原哀って子にきいたの。前に病院であなた“蘭”って言つてたじゃない？ あれは毛利蘭の事だつたの」

和樹は頭を押さえいつ意識が飛ぶかわからない状態の中必死で堪えていた。

頭痛が治まり肩で息をしながら千代を見た。

「……思い出した。でも、まだ何かが抜けてる。僕の名前は江戸川コナンです」

ハッキリした口調で自分の名前を言つ。しかし、コナンが思い出したのはほんの一部、工藤新一のことはまだ記憶をとりもどしていかつた。

「そうやつぱり、貴方は江戸川コナン君だったのね。ちょっとまつ

てて？動こぢやダメよ？」

念をおしつつ、部屋をでていった。

「はい阿笠ですけど」

千代はコナンについて灰原に電話をした。

「山本千代です。袁ぢやんだよね？」

灰原は“ええ”とだけ答え千代の言葉待つた。

「彼江戸川コナン君に間違ひ無いわ。大分記憶戻ってきてるみたい
い？」

「それは出来ないわ。もう少しこの子を預からせて貰うわ」

「え？ ちょっと千代さん？」

「悪いわね、返せなくなつたの。でも元氣だから

「ちょっと！ ちょっとーーー」

灰原の声もむなしく、電話は切れてしまった。思いもよらない出来事に灰原は少しの間頭が真っ白になつた。

「博士！ 一藤君が見つかつた！ ！」

我にかえつた灰原は急いで博士に事情を話した。

「なんじゃと！新一君が記憶喪失？今はビートルのんじゃーー？」
焦りながら灰原に聞くが灰原は横に首をふるだけだった。

「わからない。ただわざ電話があったの。そのまま預かるつて、返せないって」

博士はオドオドしながら、警察を呼ぼうとした。

「待つて博士！もう少しだけ待つて！…」

灰原は必死に博士を止めた。

「また何か電話が入るかも知れない。だからもう少し待つて」

博士は受話器をおろした。

「千代さん？ どうしたの？」

電話の前に立ち忽ち千代を見て声をかけた。

「いえ、何んでもないわ」

いつもの微笑みを「ナン」に返した。

第四話～戻つたある記憶～（後書き）

ふうなんとか連休中に出来上がりました。
もうすぐテストが終わるのでせかうこんなに口空かず投稿できる
とおもいます

さて

コナンの記憶少し戻つたのはいいものの厄介な事になりました。

千代はこれから向をするのでしょうか……。

次回公園でーー何かが起きる

では

第五話～謹禁～

灰原の電話が終わり千代はコナンと外へでて、杯戸公園に向かった。杯戸公園につきベンチに座り周りの子共たちをみながら聞いた。

「コナン君？ どうしてあんな浜辺に倒れてたの？」

「あまり覚えてない。ただ誰かを追つて崖まできたの。でもその人と入れ換えて崖から落ちた。思いだそうとするといつも頭の中霧がかかってる」

コナンは下を向き拳に力を入れた。千代はその光景を見てコナンを抱き締めた。

「ゆっくりでいいのよ。焦らないで」

「ありがと。でも早く思ひ出せなきゃみんなが心配してる。それに千代さん僕を返さないつもりでしょ？」

千代はハツとした。

「電話の内容を聞いていたの？」

焦る気持ちを押さえながら千代はこいつをひそみ笑ってみせた。

「少しだけ」

「やう……じやあ「めんなさいね」

「う……」

誤りながら千代はコナンの腹部を殴り、氣を失わせ家に帰った。

「ほんとはこんなことしたく無かつた。でも貴方が悪いの。電話内容聞いた貴方がね」

一人言のように言いコナンの手足を縛つて何時もの部屋に鍵をかけた。

あれから二十分が経ちようやくコナンは目を覚ました。体の異変に気付き懸命に解けようとしながら手首に傷がつくだけだった。

（ほんとに、誘拐の形になるとわな。情けねえ。でも、あの人なんか嫌な感じしねえんだよなあ。殴るうとしたときほんとに謝つてる感じの顔してたし。もう少し探つてみるか）

コナンは手首を動かしながら千代の事を考えた。コナンは氣を失っているうちに記憶をすべて取り戻していた。しかし今も尚記憶喪失のフリを続けた。

「あら、起きたのね。ごめんね。殴つたりして。でも、もう少しの辛抱だから」

千代はまた部屋に鍵をかけた

第五話～監禁～（後書き）

こんにちわ

今日はバレンタイン～

皆様何か良いことありましたか？？

私は後期テストがやっと終わりました。
疲れました。

と、今日から少しづつ投稿していきます

れて

もひすべ、キッドがでてきます！

次回キッド出

では

第六話～千代とキッド～

千代はコナンを家において、家を出た。

「いめんね、コナン君」

一人咳くと険しい顔つきに変わった。千代は車に乗りキッドの待つ倉庫に向かった。

「出てきなさい！ キッド！！ もう予定時間よ……」

千代はある倉庫にいき叫んだ。

「これはこれはお早いお着きでお姫さま」

フツと現れたのはキッドだつた。キッドは不適な笑みを浮かべ千代を見た。

「返しなさい。私のダイヤ！！ 盗んだでしょ！」

「人聞きわるいですよ。あれは貴女が盗んだ物。それを返すために私は貴女から盗んだのです」

不適な笑みのまま千代に一、三歩近づいた。

「なら、この子を殺すわよ？」

キッドの前にコナンが移った新聞の切り抜きを投げた。

「……」

キッドは少し驚き切り抜きを拾つた。

「知ってるわよね？ 彼キッドキラーだもの。今は私の手中！ いつでも殺すこと出来るんだから」

フフフと笑う千代に歯切りをした。キッドは彼がどうして彼女のところに居るのかが気になった。

「なぜ、ボウヤが出てくるのです？」

「コナン君は浜辺で倒れるのを私が助けたのよ。そのまま記憶がないから家で育てるわけ。わかったなら早く返しなさい」

理由を聞きこれまで以上に驚いた顔をした。

「わかりました。では明日のこの時間ダイヤを返します。その時彼も返してください」

「良いわ

千代の返事を聞き一瞬のついでキッドは立ち去った。

第六話～千代とキッド～（後書き）

お待たせしました！

キッド参上です（笑）

少し短いですね……

すみません

これからコナンに災難が（の予定）

応援メッセージありがとうございます！
これからも、評価感想お待ちしております

第七話～千代とコナン～

千代は家に帰るなりコナンの居る部屋の鍵を開けた。千代はコナンの側に行くと、自然と手首の方へと手を移した。見ると無数の傷が着いていた。

「何もそこまでしなくても。ほら、リビングにあいど、ご飯出来てるから」

千代はコナンのロープを外しリビングへと向かった。

ご飯が終わりまたあの部屋へと向かう。抵抗してみるが、大人の力に勝てず後ろ手に手首を封じられた。そのまま抵抗出来ずロープで縛られた。

「お願い。抵抗しないで？ これ以上コナン君を傷付けたくないか

「う

少し涙目でコナンを見る。コナンは少しの間黙り口を開いた。

「ねえ？ どうして監禁するの？ 千代さんは何がしたいの？ 僕をどうしたいの？ 殺したいの？」

一気にコナンは千代に聞いた。

「ただ貴方がキッドキラーだったから彼から宝石を取り返すときこ材料になるって思ったの」

「キッド？」

「ナンはポカソとした顔を千代にみせた。

「あ、そっか。まだ完全じゃないのね。あなたキッドキラーなのよ」

一旦部屋を出て彼が載つてゐる新聞を持つてきた。

「ほりね。だから、貴方を返すかわりに宝石を返すつて約束したの」

「それで僕を監禁してゐるわけか」

少し睨むコナンに涙目になり訴えかけた。

「初めは監禁するなんて思つても見なかつた。ほんとに貴方の親を探す予定だつたの」

コナンを抱き締め小さな声で話した。

(運わりーよな……俺)

心の中でため息を付き千代をみた。

「俺さ……もう記憶全部もどつてんだ」

千代は大人びた低い声の主に驚いた。

「それで? 取引材料に使われてる俺はどうなんの?..」

「取引はしないわ。でも、宝石はかえしてもいい」

「なー? 相手はキッドだぞ! そう簡単に行かねえだろうが!..」

！」

驚きながらもコナンは怒鳴る形で千代を見た。もう探偵のスイッチ入りっぱなしで、子供の言葉使いなと忘れてしまっているような勢いである。

第七話～千代とコナン～（後書き）

すみませーーん

サブタイトルが思い付かないバカな作者です（へへへ）
考えて思い付かなくてアノような題名に……

すこし動きましたかね（苦笑）

コナン記憶がもどったこと千代にいましたーー！
これからどうなる？（作者自身考え中）

次回……電話

では！

第八話～電話・灰原とコナン～

「コナンは必死で千代を説得するがまったく聞こえとなかった。

「嫌なんだよ。俺の前でそんな事されるの。俺が崖から落ちたの犯人を助けるため。それに俺を助けたのあんただろ？ 助けてえんだよ。あんたも」

静かに千代の耳の側で囁くコナンは弱々しい声だった。

「ごめんね。でもやつと見つけたダイヤをキッドにそのまま取られるわけにはいかないのよ」

そのまま部屋を出でていってしまった。残されたコナンは歯切りをした。

自分の無力さに嫌気がさすほどだった。

千代は部屋を出た後どこかに電話をかけ始めた。

「阿笠ですけど？」

「夜分すみませんね」

千代がかけた場所は阿笠博士の家だった。

「あなた、もしかして！？」

「ええ、私よ山本千代。彼の記憶全てもどりつてゐるわ。伝えたい事はそれだけ」

「ちょっと待つて！ 江戸川君の声を聞かせて！？」

千代は少し考えてから“わかつたわ”と返した。

「ほら、灰原哀つて子が声聞きたいってぞ」

千代は「ナンの耳に受話器をあてた。

「工藤君？ 大丈夫？ 記憶全部戻つたの？」

今までに聞いたことの無いような焦り声に「ナンは少し驚いた。

「ああ、大丈夫だ。記憶も全部戻つてるよ」

落ち着いた声を灰原に聞かせた。

「そう。ならいいわ。そいつ、愛しの彼女が貴方をずっとさがしてゐるわよ？」

「え？ ああ蘭のことか。元気だつて伝えといってくれねえか？ まだ帰れそうにねえんだよ、それにこの事内緒にしといてくれねえか？」

「それは貴方の状況次第で決めるわ。今どうしてゐの？」

「一言で言えば監禁かな」

「ナンは苦笑しながら千代をみた。千代が少しだけ睨み付けた。

「ちよつと何笑つてゐるのよ…… 何もそれであいの」

呆れた声で、でも慌てたような声が電話の向こうから聞こえた。
「だから大丈夫だつて。ただ拘束されてるだけだし、怪我もしてねえし、だから頼む」の事内緒にしててくれねえか？」

「わかつたわよ。ちゃんと帰つて来なさいよー ほんとあなた何かにとりつかれてるわよ。帰つて来たら、お祓いしてもらいましょう」

「ハハハ……ほつとけ」

「まあ頑張りなさい名探偵さん?」

「ナンが文句を言つ前に千代が受話器を取り上げた。

「じゃあね。やつ言ひ」とだから

そのまま千代は受話器を置いた。

「あなた喋りすゞぎ」

千代は「ナンをおもいつきり睨んだ。

「じゃあ、あんたが無理矢理でも会話を中断すれば良かつたじゃねえか」

「それは……」

「それに内容事態は一言も喋ってねえぜ？」

「わかったわよー。そこそこなさこよ。出なきゃ殺すわよ」

「い」勝手に

不適な笑みで千代を見た。千代はそのまま出ていった。部屋は空しく鍵の音だけが聞こえた。

（阿笠邸）

灰原はため息を付きながら受話器を置いた

「それでどうじゃったんじや」

「工藤君なら大丈夫よ」

「じゃが哀君新一が大変なことになつてゐんじやろー。」

「ええ、でもそれは彼と犯人の問題。私たちは彼が帰つてくるのを祈るだけ。わかつたかしら博士？」

灰原はもう迷いつなくなぐ博士に有無をいわせない口調だった。

「哀君がそこまで言つながら信じてみよつ」

博士はアタフタしながら灰原を見た。その顔はやつとちがい優しい顔だった。

「ありがとう博士」

灰原はまた受話器を持つて電話をかけた。

「はいもしもし毛利探偵事務所です」

第八話～電話・灰原とコナン～（後書き）

1日置いての投稿です灰原とコナンの電話話。一人あのやりとりすきなのです

やっぱり灰原に逆らえないコナンでした（ ）

つてこんな楽しいストーリーじゃないよ実際…！ 一人突っ込む作者

お知らせ

2月25日から29日まで投稿出来ません。

すみません

しかし3月1日からは再開です
これからも宜しくお願ひします
勝手な作者をお許しを！

次回電話パート2（誰と誰の会話か想像つくかも）

では！

第九話～電話・灰原と蘭～

灰原が電話したのは探偵事務所だつた。

「灰原です」

蘭はハッとして涙で潤んでいた瞳を拭き取つた。

「あの。江戸川君のことで話さなきやいけない事があるの」

「えつ？」

もう、会えないかも知れない」と心の何処かで思つていたのかもしれない。止めたはずの涙が勢いよく出出来た。

「江戸川君は生きてる」

“願つていたことが叶つた”蘭の涙は一瞬で嬉し涙に変わつた。

「い、いまどこに？」

涙声で一生懸命声を絞りだした。

「それがわからないの。今、彼記憶喪失なの。それで、『山本千代』って言う人のところにお世話になつてて、記憶が戻り次第帰つてくれるらしわ

灰原は出来るだけ蘭を心配させないように教えた。

「そつか！良かつた。ありがとう哀ちゃん
蘭は優しくお礼をいい受話器を置いた。

(大丈夫だよね？「ナン君）

自分自身に言い聞かせるように胸に手をあてた。

（山本モー

「フフ、よくねむつてるわね」

千代はコナンのいる部屋の鍵を開けた。

朝食に睡眠薬をいれ今はぐっすりと寝ている。千代はコナンを助手席に座らせ、車を発進させた。

窓から吹く爽やかな風を受けながらコナンは目を覚ました。まだ働かない頭を少し降り千代を見た。

「あら、起きたのね。寝顔可愛かったのに」

千代は残念そうにコナンを見た。

「何処に行こうとしてんだよ？」

精一杯の睨んだ顔で千代を見る。少し動いてわかった。今コナンの首筋に細いタコ糸のような物があった。そのタコ糸にはカッターの刃が固定されていた。“動けば動脈切るぞ”と脅されているようだ……。そしてタコ糸は後部座席に繋がっていた。

「（）めんなさいね。あなたそうでもしないと暴れるでしょう？」

しかし、お構い無くコナンは拘束してある手を動かす。その度に小さな首に小さな傷がついていった。

「もつー！ わかったわよ。糸はほどくわよ」

千代は車をコンビニの駐車場に止め、コナンの口をガムテープで封じた後、複雑に絡む糸をとった。

そして、コンビニで買ってきた消毒液でコナンの首筋を治療した。少し痛みに歪む顔を見ながら“自業自得よ”っと小さな声で呟き、手のロープをきつく結び直し、ガムテープを外し車を発進させた。

第九話～電話・灰原と蘭～（後書き）

お久しぶりです m(—_—)m

今日か明日で2月の投稿は終わりです
すみません一週間あきます。

わて

今回の話し車の中の「ナン怖いですね
ここ消すかどうか迷つてましたが書きました。次の話しの為に
想像すると怖いです（苦笑）

哀ちゃん蘭に話しました！まあ半分は嘘の情報ですがね（笑）
これで蘭すこしは大丈夫かな

事件のことについての「ナン」と千代はもうひとキッド哀ちゃん博士
です
みんな口が硬いはず！！

では

明日か来週に会いましょう!!

第十話～お願い～

～車の中～

千代は運転しながら、コナンを確認した。

「お願いがあるの

千代は前をみたままコナンに話しかけた。コナンは何も言わず千代の方を向いた。

「今から飲んで欲しい物があるの」

車を傍らで寄せてポケットから小さな袋を出した。

「睡眠薬？」

「ナンは思ひ当たる薬の名前を口に出した。

「ええ、そうよ。お願い口あけてくれる？
「でも、なんで？」

「それって誰を？」
「あなたはそこまで知らなくていいのよ。別に殺したりしないから」

コナンは千代を睨む。殺されないのは解りきっていた。今までの行動をみればコナンを殺す気など全くないのだから。しかしコナンが

きこたのはキッドのこと。コナン自身を殺しきれないナビキッドは違つ。千代はキッドを恨んでるコナンはそう確信した。

「誰つてあなたに決まってるじゃない」

「そつか。でも、こいつちからもお願い聞いてくれる?」

驚く千代に不適にわからずコナン。

「千代さんで従うかわりにキッドを殺さないでくれる? 千代さんキッドを殺そうとしてるでしょう?」

「あ、あなたには関係ない」とよ

焦る千代をみてもまだコナンは不適に笑つ。主導権が少しづづコナンに向いていった。

「ふーん。千代さんがOK言つまで俺は飲まないし、このままだと予定時間すぎちまつぜ? それにキッドを殺せば監獄行きだ。今から千代さんがやううとしてることはもう俺にはどうにもならねえこと。でも殺さなかつたら千代さんはそのままこの世界で生きていける。俺が監禁されることには俺らと灰原しかじりねえから別に世間ではさわがれてねえんだ」

「でも、彼女が警察に言つたら」

「言わねえよ。あいつ約束守る奴だし。だから俺こしたことないから、キッドを殺すな」

「わ、わかつたわよ。殺さなきやいいんじょ？ 殺さないからこのとこ誰にも言わないで」

「大丈夫だから。千代さんが守ればの話だけど」

少し沈黙が続いた。コナンの顔は真剣そのものだった。

「わかつたわ。誰も殺さない。だから」

「……わあつたよ」

千代は睡眠薬をコナンの口へと入れて水を注ぎ入れた。

（数十分後）

コナンは徐々に意識が朦朧としはじめてきた。必死で睡魔と戦う。しかし、勝てるわけでもなく最後に千代にぎりぎり届くような声を絞り出した。

「絶対……守れよ……」

そこでコナンは眠りについた。

「大丈夫だから。貴方ほんとに小学生なの？」

眠りに就いたコナンの頭を撫でて、千代はそのまま倉庫へと向かった。

第十話～お願ひ～（後書き）

“わざわざ日曜日です

勝手ながら明日から29日まで休みます

はい、車の中での会話！簡単に口ナンセンスのまゝのは難しいかな（笑）

お互いのお願い叶つのだらうか…！

次回キッドヒ千代

では

第十ー話～ルーフ～

（倉庫）

千代は車の助手席の窓をほんの少しだけ開け倉庫の中へと入って言った。

「時間通りですね。お姫さま？」

千代がある程度倉庫の中へと進むと、ビニからともなくキッドが現れた。

「ええ。時間は守るタイプだから。まあおしゃべりする時間わ無いわダイヤを返しなさい！」

「これですね？」

「ええ」

掌につけたそのダイヤを千代の前に見せた。

「それで、ボウヤは？」

「ルーフには来てないわ。」

千代は嘘をついた。キッドの方を真つ直ぐ見て、目をそらすことは

なく見た。

「 “ イリヤ ” にはでしょ？ 」

キッドは簡単に見抜くように訪ねた。

「 しかし、この側にいますよね。そして、彼が今ここに現れないのを見ると、 “ 動けない状態 ” とこうわけですね？」

千代は焦った。何もかも見透かされているような顔をしたキッドで一步二歩後退りをした。

「 まあこれは返しましょ。もう用はすみましたので」

キッドは千代にダイヤを軽く投げ立ち去ら让りとした。

「 ねえビーリー？」

その言葉にキッドが足を止めた。

「 どうして何もしないの？ 貴方たちおかしいわよー 私みたいな人をどうして助けるの？」

「 “ 貴方たち ” ってことはやはりボウヤもつてことですね？ まあ答えはボウヤと一緒にですよ。ダイヤのほうは美術館に返しといってくださいね？」

キッドは言い終わるか終わらないかで姿を消した。

千代はコナンの居る車に戻った。

今も寝てるコナンの首に果物ナイフを当ててみた。しかし、それ以上手が進まなかつた。

(今なら簡単に殺せるのビビッとして? ビビッとしてこれ以上動かせないのよーー)

心の中で叫ぶ。コナンを涙田でみつめワナワナ揺れる手からナイフが落ちた。

「『めんなさい』……『めんなさい』

壊れた機械のように何度も何度も謝り車を発進させ家に帰つた。拘束していた手足をほどきおぶつて部屋に入る。布団をしきそっこ寝かせた。千代はその横に座つた。

第十一話～心ひびいて～（後書き）

読んで頂きありがとうございました（――）

一週間かつてに休んでみませんでした。

理由

学校のほうでテストがあり点が悪く追試をうけていました。（作者
馬鹿なので……）

しかし今日おわりましたのでまた再開です

さて今回は……

キッドとあつた千代。キッドはいろいろなことに気付いてました。
不思議ですね……そこはスルーしてください詮索しないでください
……。

キッドとわかった千代はコナンのいる車にもどって危ないことしま
したーーが無事でした（笑）

千代はコナンを巻き込んではあるけどどうしてもコナンを殺すこと
できない人なんです。コナンが千代をいい方向に戻してますね（
多分）

では

次、寝起きのコナンと千代の会話

本日はありがとうございました。

第十一話／無事

一時間後小さな呻き声と共に田を覚ました。周りを見渡す。そして千代と田があった。

「 もう……終わつたから……」

「 もうか」

「 『めんなさい。貴方を……貴方を殺そうとした』

千代の言葉に驚かないコナンは別のこと気に付いた。

（拘束されてない）

コナンがフツと笑つた。

「 なんで？ 殺そうとして殺せなかつた訳は？」

自信たっぷりで千代に聞いた。

「 分からない」

「 それでいいんだよ
「え？」

「 あなたの心にまだ“人間”がのこつてたんだから。心の中で葛藤してたんだろ？ で、善が勝つた。それでいいんだよ」

止まつていた涙がまた流れ出る。布団に入つてのコナンを抱き締めた。コナンは急なことに驚く。

「「」めんなさこ」「」めんなさこ」

今日何度も田かの謝罪。しかしコナンから以外な言葉がかえってきた。

「千代さん。ありがとう」

次に驚くばんの千代。田を丸くした。

「あなたに感謝されるよひなこと、私してないわよ。逆に傷つけてばかりだつたじやない」

抱き締めていたコナンを布団の中に戻した。

「千代さんは俺をまた助けた。」これで一回田。もし「」の誘拐が千代さんじやなかつたら、多分この世に居なかつたと思つ。睡眠薬飲んだとき千代さんにほいつでも俺を殺せたはず。でも千代さんは逆のことをした

田がみるみるうちに大きくなる。限界に近い田でコナンを見た。

「あなた、お人好しつて言われたことない?」

「え? ああ」

曖昧に返事を返した。

「普通ならここんなことされて“ありがとう”なんて言葉思い付かないわよ。むしろ憎むわよ」

“やうか?”とキョトンとした顔をした。

「貴方つて何者なの？」

千代は神経にきいた。コナンも田を背けず一ツコロりわらつた。

「僕はただの小学生だよ？」

一ツコロりした顔がそれ以上に一ツコロりした顔になった。

「ほんとかしら？」

千代の疑う田。今度はフッと笑い大人びた顔になつたコナンは先ほどより低い声をだした。

「ただの探偵だよ」

コナンの大入り体を起こそとしだが千代に止められた。
の感謝をした。

「ありがとう」

コナンは大入り体を起こそとしだが千代に止められた。

「今からお粥作つてあげるから大人しく寝ときなさい？ まだ、だ
るいんじょ」

そういう残し千代は部屋を出ていった。今度は鍵のしめる音はしな
かつた。

「誰も傷つけることなく終わつたんだな」

仰向けの状態で誰に話しかけることなく一人呟き目をとじた。

三十分後

コナンは目を覚ました。起き上がりて周りをみたけどまだ千代はきていなかつた。

部屋に時計がなく自分自身どれくらい寝ていたのかわからなかつた。

「コナン君おきたのね」

数分後ドアが開き千代が両手にはお盆をもって入ってきた。

「出来たわよ」

千代はお粥をお茶碗にいれコナンに差し出した。

コナンは少し警戒した。

「大丈夫よ。薬なんて入つてないから」

コナンは安心してお茶碗を受け取つた。少し食べてみる。

「あ、美味しい」

「あたり前じゃない。私これでもレストランで働いてたのよ」

千代は笑いながら、コナンに話した。

「ねえ、コナン君。明日帰ろつか？」

「え？」

「コナンは食べていたお粥の手をとめた。

「もう、終わつたし。私も大丈夫だから……。哀ちゃんつて子も心配してゐるだろうしさ。ほんとは離したくないんだけどね。だって私たち子供いなかつたから。なんか子供が出来たみたいで、手放したくなないな」

千代は寂しそうにコナンを見つめた。

「やつか。じやあ、明日一日千代さんの子供になつてあげる」

「シコリ笑うコナン躊躇つ千代。

「いいの?」

「いいよ」

子供の声を出しあつた。

「じやあ、明日遊園地いかない? いつて見たかつたのよ」

笑いながら千代はコナンを抱き締めた。コナンの顔が少しだけ赤くなつた。“これで何度もだらうか”つと心の中で思った。

第十一話／無事／（後書き）

3月です！

色々ありましたが一件落着ですかね（笑）

一日千代の息子（笑）

もうすぐコナンが米花町にかえれます！！

次回遊園地

では

第十三話～トロピカルランド～

～トロピカルランド～

千代と夫とコナン、三人でトロピカルランドにきた。改札口の前でコナンは一人にわからないよう苦笑いをした。この遊園地は“コナン”の原点だったことはこの夫婦は知らない。

「ねえコナン君はどうしたい？　あ、この辺江戸川コナンって名前なんだよ」

千代は夫である健二けんじに話した。

「ほー、コナンね。両親コナン・ドイルが好きなんだね」

健二は一言も口しながらコナンを見た。

「うん！　大好きなんだ」

この上無い笑顔でコナンは振る舞つた。

その後ジェットコースターをはじめ、お化け屋敷など楽しんだ。

「お皿何がいい？」

少しの空白の時間がながれた。

「ホットドッグが食べたい！」

「分かったわ」

千代はホットドッグを買いにいった。

「コナン君？」

「何？」

健一が「コナンを呼んだ。子供スマイルをだし健一と向き合った。

「悪かったな。千代がやつたんだろ？ 手首の傷」

「え……？」

躊躇いながら手首をそっと隠した。

「大体は田星はついておる。千代は今までにない笑顔だつたからな。今まで何かがあつたことくらい夫ならわかるよ」

「流石だね。でもおじさんが謝る理由はないよ」

「コナンは大人びた顔をした。そこで千代が帰ってきた。

「はい！ コナン君ホットドッグ！」

「ありがとう千代さん」

お昼を済ませてまた遊んだ。最後に観覧車と記念撮影、千代はほんとに楽しそうにしていたことにコナンは胸を撫で下ろした。

「後はパレードだな」

健一が嬉しそうな顔をした。

「あれ？ けんちゃんパレード好きだったの？」

からかいつつに千代は健一に話しかけた。

「かもしれないな。だつてお前とみれるんだから」

健一がボソリといい千代の顔が赤くなつた。コナンは一人の行動に苦笑いをした。

第十二話～トロピカルランド～（後書き）

「ねえなセー」「んなにもあこでしまつて（ノーノ）

いろいろあり「」に来るのがとても遅くなりました（△△△）

はい、今日ははじめてまともに千代の夫・健一が出てきました！
そして事件のことと薄々感じていた「」にコナンもびっくり！でしたね！

次回トロピカルランドから帰ってきて

では

第十四話～千代との暮らし最後～

（自宅）

千代たちはお風呂をすませコナンと三人で布団を並べて布団に入つた。

「今日はありがとうございました。楽しかつたよ」

千代は深々とお辞儀をした。

「僕も楽しかつたよ」

笑い合つふたり健一もまた穏やか笑みを浮かべていた。

「明日哀ちゃんに連絡するね。ほんとありがとうございました」

「千代さんが大丈夫なら帰るよ」

千代は“大丈夫”とコナン笑みを浮かべた。三人はそれぞれ眠りについた。

（次の日）

千代は灰原に電話をかけた。

「もしもし？ 山本千代です。灰原哀ちゃんいますでしょうか？」

千代からの電話に驚きながらも灰原はいつもどおりせつした。

「はい、私が灰原哀です」

「今日、江戸川コナン君を帰します。あなたの住所教えて下さい」
灰原は博士の住所を千代に教えた。

「分かりました。では後程」

千代はそこで電話を切つた。コナンはその会話を聞き内心ホッとした。

「コナン君もうすぐだから。あ、そうだ返さなきゃ行けない物があるの。こっちに来て?」

コナンは千代の後に続き千代の部屋に入った。千代は押し入れから大事そうにそれをだした。

「あなたが初め身につけてた物。これ見てあなた結構震えてたから今まで隠してたの」

それは蝶ネクタイ型変声機や時計型麻酔銃などの今までコナンが身につけていた物だった。

「ありがとうございます」

コナンは全ての物を受け取つた。

「さあ帰りましょ」

千代はコナンに手を差しのべコナンもその手を掴んだ。そのまま千代は部屋をでて車に乗つた。

第十四話～千代との暮らし最後～（後書き）

題名想い付かなかつた
もひすぐ終わりです。

次回まだ出来上がっていません（涙）

では

第十五話～博士の家～

（阿笠邸）

博士の家にチャイムが響いた。灰原は待ち構えていたよつこ扉を開けた。

「おまよハジヤカサス。朝早ベヒメタナセ」

千代は深々と頭をさけだ。

「いこんじやよ。わあ中に入りなセー」

博士が優しい声で喋りかけ千代を家の中に招いた。

「よく助かったわね」

灰原が「ナンの側にいき小声で話しかけた。

「ああ、心配かけて」めんな

「別に心配なんて……つて工藤くん首怪我してるじゃないー…」

「え？ ああ、ちゅうとな

「ちゅうとつてなによ」

「いや、抵抗みたいなことしね……」

灰原の顔がみるみるつむづむ上がり睨み付けた。

「馬鹿じゃないの？ 抵抗つてあなた探偵でしょ？ 抵抗したらど

うなるかなんてわかつてることじやない！」

小声で話していた筈の声が玄関中に響いた。

「哀ちゃん！ コナンくんは悪くないから。だから、ね？ お願ひ
彼を攻めないで…！」

博士と話していた千代がコナンの横に行き頭を下げた。
灰原は無言で立ち去り地下室への階段を降りようとした。

「哀ちゃん…！」

「わかつてゐわよー 別に攻めてるわけじゃない。ただ心配になつ
ただけよ」

「そつか。」めんね。沢山迷惑かけて……でも、私コナンくんに会
えて良かつたつて思つてゐるわ。でなきや今『』誰かを殺していくか
もしけないから

「そう……また彼危険犯してまで助けたのね」
すこし離れたところに居るコナンを優しそうな目で灰原は見つめた。

「ええ、ほんと他人のことばかり考えてたわよ

千代もコナンを見つめた。

「それで貴方はこれからどうするの？」

「せつかくだから夫と仲良くするつもつよ

「そひ……頑張りなさい」

灰原はそう言い残し地下へと向かつた。千代は深々と礼をした。

「あー、千代さん。ダイヤかえして？ 僕が返しておくから」
「コツとした顔でコナンは千代に近づき手をだした。千代は素直に
ダイヤをコナンに渡した。

「それで、これをどうするつもりだつたの？ 夜中にダイヤ調べて
たでしょ？」

千代は驚きコナンを数秒間見つめたが、目をそらし小声で答えた。
「ごめんなさい。それだけは言えないわ。でも、もう用は済んだわ」

コナンはそれ以上追求せずにダイヤを大事にしまつた。

「それじゃあ、私はこれで。ほんとにありがとう」

博士とコナンは玄関まで見送つた。

その後、玄関に一枚の手紙が落ちているのにコナンは気付いた。
コナンは拾い上げ差出人を見たが書いていなかつた。
表には

“江戸川コナン”

とかかれてあつた。

第十五話～博士の家～（後書き）

久々の投稿です。お待たせしました！

無事コナン帰つてきました！パチパチ

もう数話でこの話しあわりです！

そして

誰か～～キッ～とコナンが会話してるときのキッ～の口調を教えて
くれ～～～～～～。

h e l p m e ~

次キッ～とコナンです

口調がわからない……

千代とキッ～は簡単なのに

コナンとキッ～は難しいと思つのは私だけ？

では

第十六話「夜」

～その日の夜
とあるビルの屋上～

小さな子供の姿と白い服をきた人が立っていた。

「俺を呼び出して何のよつだ？」

玄関に落ちていた手紙はキッドがコナンに宛てた手紙だった。

「まあそつ怒らないでください。捕らわれし王女」

いつも女性たちによくような口調で云ふやうなコナン。

「警察よぶぞ？」

「〔冗談ですよ。今日ここに呼んだのはダイヤの件〕

お互いが不適な笑みを見せた。

「これか？」

コナンのポケットからダイヤが現れた。

「ああ。渡してもらおつか？」

キッドが一、二歩近づいた。コナンは後退せずキッドを睨む。

「渡すよ。どうせ、オメーに返してもうつもつだつたしよ

「ナンはキッドにダイヤを投げた。キッドは軽々うけとった。

「助かつて何よりだな名探偵?」

軽々とした笑顔は逆光からみると挑発的な笑顔だった。

「お前に心配されるほど、弱くねえよ」

「一時期殺されかけてなかつたか?」

「うつせー。なんで知つてんだよ。とつと逃げねえとまじ警察呼ぶぞ?」

「見てたからな、お前の首にナイフが突きつけられてるといひをな。そろそろ退散するよ。ありがとな名探偵」

「見てたのかよ……。それより礼言われるよいな」としてねえよ。ただ捕まつてただけだ

礼をいい飛び立とう背中をみせた時呆れ顔で「ナンはキッドをみた。

「イエイエ。お前がいなかつたら怪我をしてたかもしけねえから、じやあな!」

キッドは屋上から飛び立つた。

「だから、なんもしてねえって」

空を見上げながら一人「」とのよつてつたあと階段をおひた。

第十六話～夜～（後書き）

キッドの口調悩んだあげくあのよつな口調になりました。 m (ー)
アドバイスを……未熟者より
では

さて、キッドとの接触もおわり次は久々蘭ちゃん登場かもー！

第十七話～毛利家に帰路～

コナンはキッドと別れ博士の家に帰った。

「あら、お帰りなさい？ コーヒーでも飲む？」

帰つてあたら灰原がリビングに座つていた。

「ああ、もううつよ」

「で？今まで何してたか教えてもらいましょうか？ 探偵さん？」

コーヒーを渡しコナンに向ひつ形で椅子に座つた。

「わかつたよ。まず、お前ひと一緒に旅行いつた日覚えてるよな。あの日俺と犯人入れ換えに崖から落ちただろ？その後浜辺で倒れて俺を千代たちが見つけてくれたんだ」

「あら案外優しい人なのね」

灰原フフッと笑いながらコーヒーを口にした。その後記憶がなかつたこと、千代がキッドを憎みキッドキラだったコナンをかえすことが出来なかつたことをほぼ全てを話した。ただコナンが眠らされた後殺されそうになつたことは省いた。

「ふーん。あなたづくづく不運よね。まあ明日彼女のとこに帰りなさいよ。記憶喪失つことは話してあるから。

「サンキュー灰原」

「それじゃあ私寝るから。あなたもじっくり寝ときなさいよ。あと、手首の傷と首の傷さつさと直しひときなさいよ。彼女が心配するからそのまま博士がいる寝室に向かった。

「治すつても自然に直るの待つしかねえって

「なら私の万能薬試してみる?」

寝室にいったのはずの灰原がそこに立っていた。

「結構です!」

コナンは慌てて手をふった。

「残念。じゃあハイネックの服きて帰りなさい?
また灰原は寝室に消えていった。

（次々の日

毛利家）

コナンは灰原の言つとおりハイネックの服をきて階段を上がりドアに手をあて開けた。

「ただいま

二人は驚きドアに注目した。

「コ、コナン君!？」

蘭がドタバタとコナンにかけよりコナンを抱き締めた。

「良かつた。良かつた。心配したのよ？ 哀ちゃんから記憶喪失だつてきいてびっくりしたんだからね。それで大丈夫なの？」

蘭はコナンに抱きついたまま話しかけた。

「うん。大丈夫！全部記憶戻ってるよ！蘭ねえちゃん！」

元気のいい子供のふりをしてニコニコ笑った。

「そう良かつた」

蘭はコナンを解放した。

第十七話～毛利家に帰路～（後書き）

ほのぼのです！

灰原と「ナンの」いつもの会話

万能薬どんな効果があつたのでしょうか（笑）蘭と「ナンやつ」と出

会いました（ ）

こちらもクライマックスです！
もう少しのお付き合いでーー！

では

第十八話／最後の災難？それとも最初の安心？

コナンは久々の毛利家で朝御飯を食べた。

「明日から学校いける？ 今日は休みとったから」

「うん！ 大丈夫だよ」

「今日はゆっくり休んでね。それに……」

「何？」

少しうつむき加減の蘭に一コ一コしながら蘭を見た。

「コナン君熱あるでしょー？」

「へ？」

突然な蘭にコナンはポカンとした顔になつた。“熱がある”コナン自身も分からなかつたことだった。長年弟として一緒にいるためのカンだつたのかもしれない。

蘭は体温計をコナンにわたした。

体温計が一定の音を鳴す

「ほらやつぱり三十八度もあるじゃない」

蘭はコナンを小五郎の部屋までつれていつた。

「大丈夫だよ。そこまではなくても。全然平気だよ？」

コナンの言葉を無視し蘭はせつせと布団をだしはじめた。

「何が平氣よ。しんじこんでしょ？それに甘えてここなのよ？」

コナンは照れくさそうに頷き、ぱりっと布団の中に寝かされてしまった。

「学校いってくるから大人しくしてくのよ？」

「うん」

蘭はその場から出でていった。

（熱つて実感無かつたんだけどなあ。いろいろ有りすぎて、ここに帰つてきてホッとしたんだろう。まあ今日くらいゆつくりするか！）

コナンはそのまま田を閉めた。

子供の体といふことで一度田を閉じると一定の寝息を立て、すうつと夢の中へと誘われていった。

（夕方）

蘭が帰つてきた。真つ先に小五郎の部屋に向かいそつとドアを開けた。コナンは起きることなく寝ていた。

蘭は微笑ましく、少し乱れた布団を直し出でていった。夕食を作つてる時にコナンの声が聞こえた。

「お帰りなさい蘭ねえちゃん」

田を擦りながら台所に立つていた。

「ただいまコナン君。熱はかりに行こつか

コナンの手をとつて間にいく。蘭は体温計をコナンに渡した。

また一定の音がなる。

「三十七度一。結構下がったね。今日お粥だからねコナン君。部屋までもつていくからもう少し寝ていいわよ」

蘭はコナンの頭を撫でまた台所に向かった。コナンは蘭の言つとおりまた布団に入った。

ドアの向こうで足音が聞こえた

「出来たよ。コナン君ー。」

蘭は一人用の鍋とお椀レンゲとお茶をオボンにのせもつてきた。

「ありがとう

コナンは笑顔で蘭にお礼を言い座り直した。

その後、飯を食べて眠りについた。

第十八話「最後の災難？それとも最初の安心？」（後書き）

最後の災難？最初の幸せ？

一つの題名でなやみました。まあ意味は一緒ですね（ハハハ……）

さてと、おもいっきり蘭とコナンです！
コナン一日ねてばかりの生活でした！

でもたまにはいいよね

それに蘭優しいね！

理想の姉

私自身長女だからこんなこと味わったことないですが……。普通す

るのかな？妹や弟の看病。する……よね？

次回手紙

では

第十九話「手紙」

（朝）

着替えをすませてコナンは朝食のある居間にきた。

「はいこれ。体温計」

蘭が待つていたかのように体温計を渡した。
コナンは蘭の隣に座り体温計を計った。

「三十六度四。うん大丈夫良かつたね」

三人は朝食を食べ久しぶりに蘭と学校に向かった。

「おーい！コナーン」

元太たちが嬉しそうに手をふっていた。

「蘭ねえちゃん行つてくるね」

「行つてらつしゃい」

コナンは四人の元に駆け出した。

「久しぶりですね。あの口何があつたんですか？」

急な質問にコナンは戸惑いなく話した。内容には嘘は無かつたが事
件に巻き込まれたことは省いた。

「そんなことがあつたんですね。大変でしたね」

「コナン君風邪もついいの？」

それぞれ心配する声は少し嬉しい気持ちにされた。

「大丈夫だよ。もう記憶も風邪も治つたから。心配してくれてありがとうなオメーら」

「当たり前ですよ！ 僕たち少年探偵団なんですから！」

「そだぞ！ 一人でも抜けたら探偵団じゃねえしな」

「それに歩美の一番の人だもん」

アツサリ言われた言葉に光彦と元太を怒りに染めた。

「コーナーン（君）」

「ちょっとオメーら待てって」

「抜け駆けは許しませんよ！」

二人に追いかけられ学校まで一気に走った。

「歩美変な事いった？」

「いえ。大丈夫よ」

前の騒ぎを見ながら歩美はキヨトンとした顔で灰原はにわかに笑っていた。

（帰り道）

朝の嵐から免れたコナンは久しぶりに使った体力でげつそりしてい

た。

「はい。これ」

「うん？ 何だよこれ」

「知らないわ。“江戸川コナン様”って書いてあるから貴方のでしょ？」

みると白い手紙のようなもので、差出人が山本千代と書かれていた。
「昨日の夕方博士のポストに入つてたわ」

「サンキュー」

コナンは大事にランドセルにしまった。

第十九話～手紙～（後書き）

手紙と書きながらメンイすくなかつたですね
今日の晩最終話を投稿するとおもいます

手紙の内容で終わりです

最終話～仲良し～

コナンはみんなと別れ事務所に向かつた。

「ただいま！ って誰も居ねえのかよ」

コナンはソファーの上にラングセルをおきその横に座り手紙を出した。

『

江戸川コナン様

先日は本当にありがとうございました。

あの日コナン君に会つていなければ人、一人を殺していました。

コナン君に会えたこと心から感謝します。

沢山辛い思いさせてしまつたことお許しください。

今は主人と仲良く暮らしています。 最後に盗んでしまつたダイ

ヤ美術館に戻つていました。 ありがとうございます。

これからはバカなことせずにいきます。

山本千代』

コナンの顔が笑顔になり、手紙をしまつため自室へと向かつた。 コナンはもう一度読み返ししまつた。

「ただいま！」

「おかえりなさい。 蘭ねえちゃん！」

「『コナン』出迎える『コナン』に蘭も『コナン』以上に笑顔を見せた。

「『コナン』君機嫌いいね。いいことあつたの？」

「うん！」

「そつか。良かつたね！あ、買い物行こつか！」

「うふ。どこにいくの？」

「杯戸町よー 今日は安売りなの」

「そつか！」

『コナン』と蘭は用意をして、バスにのり杯戸町へと向かった。

（スーパー）

「あ、あつたあつた！今日は豚カツね」

『コナン』に肉をみせ二『コニー』微笑んだ。

晩御飯の材料を買いレジにいきかつた材料を袋につめ帰ろうとして『コナン』を呼んだが『コナン』の返事がなく振り向いた。そこには優しそうな夫婦と『コナン』の姿があつた。蘭はその夫婦に礼をした。

「『コナン』君？ この人たちは？」

「あ、僕を助けてくれた夫婦だよ」

「そつか。その節はありがと「う」ぞいます」
蘭は深々とお辞儀をした。

「いえ。じゅういち、ご迷惑おかけしました」

夫婦もまた蘭たちにお辞儀をした。

その後少し話をして別れた。

「コナン君助けてくれた夫婦とっても仲良しだったね」

「うん！」

二人は夕日の中手を繋ぎながら帰つていった。

（完）

2008年3月31日

最終話～仲良し～（後書き）

今までありがとうございました！

下手な手紙……作者文章不足ですね
拝啓敬具を使つ予定でしたがやめてくだけた言葉に直しました

あと

千代さんと蘭を合わせたくてわざわざ杯戸町へと買い物に！
全く会話無かつたけれど楽しく話てるのを想像してください

（記憶喪失から始まった災難）

無事完結致しました。応援、評価、感想、アドバイス頂き有り難う
御座います。
とても心の支えになりました

どんな話でも最後はハッピーになるように心掛けて作品を作つて行
きます。

これからも、宜しくお願ひします m(— —)m

短いですがこれで失礼します

2008年3月31日

菜花

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4931d/>

記憶喪失から始まった災難

2010年10月9日21時10分発行